

農村舞台見学会(神山町・勝浦町)



平成15年9月7日(日)
9:00~16:00

9:00 徳島駅集合
10:00~10:10 道の駅温泉の里神山でトイレ休憩
10:15~12:00 小野さくら野舞台見学
12:10~13:10 道の駅温泉の里神山で昼食
14:05~15:15 勝浦町今山農村舞台見学
16:00 徳島駅着、解散

今回は、藍住町の岩佐会員のご厚意で出していただいたマイクrobasで、神山町、勝浦町を回った。

参加者
小野さくら野舞台



阿波農村舞台の会 十八名

小野さくら野舞台復活実行委員会十一名

小野の部落の中心部を通り抜けると、右手に「歓迎 阿波農村舞台の会御一行様」の看板が目に入る。木陰から小川会長が現れた。天王神社と書かれた鳥居をくぐり坂道を上がっていくと、朝から準備をしてくれた保存会の方たちが出迎えてくれた。舞台の雨戸は開け放たれ、千畳敷のふすま絵がセットされている。舞台脇には竜と雷のふすま絵も立てかけてある。

テールが並び、これまでの保存会の活動記録まで準備してくれていた。保存会の方たちのチームワークの良さや舞台に対する思いが伝わってくる。すだちの収穫時期に当たってお盆から九月後半までが、一年の内でも最も忙しい時期とのことであり、恐縮するとともに感謝の気持ちでいっぱいである。

大和会長のあいさつの後、小野さくら野舞台復活実行委員会の小川会長から、ごあいさつと小野の野舞台について概要説明をいただき、舞台やふすま絵、天井に残されたカラクリなどを見せてもらった。木箱の中に保管されているふすま絵も出して見せていただいた。

今後、小野の女性を集めて、女性だけでふすまカラクリを復活させたり、人形浄瑠璃以外にも、ふすま絵を使った子供向けの紙芝居やお芝居など、舞台を多目的に活用していきたいとのことであった。

小野の部落

「さくら」は、名(みょう)の名称であり、正式な地名は「本小野」。神山には、松葉(上角地区)、都(寄井地区)、紅葉(青井夫地区)などの名称が残っている。いわば屋号のようなもの。明治、大正時代には「棒づき」といって、家の基礎工事を名の共同作業で行っていた。現在、地区対抗のスポーツ大会も「さくら」地区で出場している。スポーツが「棒づき」に取って代わったのかもしれないこと。

舞台

鮎喰川の洪水で流されたという旧舞台の

位置は定かではない。けやき板の棟札があり、昭和二十六年の造営であることが確認されている。太夫座は、森兼氏の設計により、平成十三年十一月の第一回復活公演時に新築したもの。

また、実際に杉の床板、大引き等の部材を撤去し、平舞台から舟底舞台への転換プロセスを見せてもらった。人形浄瑠璃はもちろんだが、お芝居や舞踊なども楽しみたい、という先人の知恵が身近に感じられる構造である。

舞台

江戸時代後期から明治、大正時代に描かれたふすま絵が、神山町全体で約一五〇〇枚確認されている。小野の舞台のふすま絵は、「松に鶴、朝日」「千畳敷」「松原」「竹に虎」「竜と雷」「紗綾型」など、犬飼のものとはまた趣を異にする興味深い図柄のものが多数残されている。板枠に寒冷紗を張って描かれたものもあり、これらは背後でろうそくの灯を動かして見せたとのことである。図柄は、「ソテツ」「アヤマ」などがある。ふすまに残された紐の位置から考えると、田楽返しの返し方も犬飼とは少し違っているようであった。

今年二月に勝浦町の有形民俗文化財に指定された。大正四年の建築で、木造平屋建て幅四間、奥行き三間の舞台で、太夫座、大臣柱を有する。阿波農村舞台の会の副会長である川上光洋東京理科大学講師の調査により、平舞台から人形浄瑠璃専用の舟底舞台に転換できる、全国的にもめずらしい仮設式舟底舞台の構造を備えていることが発見された。これを機会に保存会が結成され、昨年九月には復活公演が開催された。

修復箇所

地元建築士をはじめ大工さん、左官屋さん、屋根屋さんまでいて、修復作業のかなりの部分を出役でまかない事業費を安く上げることができたとのことである。



参加者
今山農村舞台

阿波農村舞台の会 十八名
今山農村舞台保存会 三名

予定の時間を五分ほど遅れて今山農村舞台へ到着。前日(九月六日)朝のNHK全国ニュースで紹介され、ふすまや幕もその時の撮影時のまま残しておいてくれた。文化庁の補助金があり、約三百万円の事業費で修復を行ったとのことであり、以前とは見違えるようにきれいななっていた。

大和会長からあいさつの後、今山農村舞台保存会の中野氏から、修復の手法や仮設式舟底舞台の概要を説明いただいた。

・内部の梁、束等をキシラデコール塗装。
・舞台背面の窓は、昔風の差し掛け窓とした。